

早稲田大学大学院日本語教育研究科

修士論文概要書

論文題目

日本語学習者の音声習得に対する意識の考察

諸井美砂

2013年3月

## 第1章 序論

本論文では、日本語学習者がどのような理由で日本語の音声を習得したいと思っているのか、音声習得に関しどのような意識、信念や動機を持って学習を進め、その高いレベルの習得を目指すのかといった日本語学習者が持つ意識を考察する。

筆者は、様々な言語を母語とし、その文化背景が多様な日本語学習者と出会ってきた。学習者がそれぞれの日本社会とのかかわりのなかで自らの音声習得に高い目標を設定し、様々な葛藤を乗り越え努力する姿を身近に感じてきた。時を同じくして「母語訛りは個性である」、「意味が通じれば日本人みたいに話す必要がない」といった日本語教師側のビリーフがあることを知った。学習者の個性や多様性を尊重する教育には賛同するが、学習者の意識と、日本語教師の意識にズレがあるとの印象を受けた。そこで「日本人のような発音」を目指す学習者の音声習得に関する意識を明らかにし、個々の学習者がどのような意識で日本語の発音を学習しているのかという学習者の思いを日本語教育の現場に届けることの意義と必要性を強く感じるに至った。以上が筆者の問題意識と研究の動機である。

本研究のリサーチクエスションは以下の2点である。

- 1、日本語学習者はどのような理由で日本語の音声を習得したいと思っているのか
- 2、日本語学習者にとって「日本人みたいな日本語」とは何か

## 第2章 先行研究

第2章では本研究の研究課題に関連する先行研究をまとめた。具体的には、音声習得の個人要因に注目した研究、臨界期と日本語の音声習得に関する研究、教師の音声教育に関する意識の研究等である。河野（2009）は、個々の学習者に焦点をあてた音声習得研究の必要性を指摘し、学習者へのインタビューや日記など、学習者の内省に基づいた質的研究の意義を述べている。戸田（2006）は、大人になってから日本語学習を開始したにもかかわらず、ネイティブレベルの発音を習得していると判定された「学習成功者」の成功の要因と特徴をアンケート調査とフォローアップインタビューでその個人要因を明らかにした。そして、戸田（2008）は、「今後の音声習得研究は、母語だけではなく、母方言、学習環境、学習者の意識、学習方法、インプットの量など、学習者の多様性にも注目しつつ、発展していくことが望まれる。今までの日本語音声習得研究では、学習者の個人要因を考慮した研究はほとんどなされていない」と指摘している。また、戸田（2008）は、音声習得

研究において、調査協力者を母語別や習得レベル別にわけることの弱点を「音声習得の主体である学習者の多様な個人要因が排除されている」と指摘している。

### 第3章 調査概要及び分析方法

第3章では本研究の課題を明らかにするために行った調査の概要と分析方法について述べる。研究目的を達成するために選んだ調査手法は半構造化インタビューである。以下の表に示したのが調査協力者の6名である。それぞれの協力者に対し1時間から1時間半の個別インタビューを行った。分析の観点は「日本語の音声習得したい理由」と『日本人みたいな日本語』とは何か」という点である。

学習者 (仮名)	性別	年齢	国籍	略歴
ジン	男性	20代	中国	日本に在住、日本企業への就職が決まっている大学生。
イアン	男性	20代	米国	米国に在住、日本へ2ヶ月の留学経験がある会社員。
ズェズェ	男性	20代	台湾	日本に在住、日本の大学院進学を希望している日本語学校の学生。
ミタニ	男性	30代	タイ	日本に在住、日本語教師志望の日本語学校の学生。タイで日本企業勤務経験有。
エコ	男性	40代	インドネシア	日本に在住、日本語の音声専攻について研究している日本語教師。
ペドロ	男性	50代	韓国	日本に在住、韓国の公務員派遣制度により日本留学中。国際交流の仕事に従事。

### 第4章 分析結果

第4章では6名のインタビューに対する分析結果と考察を述べた。

1. ジンさんの日本語の音声習得目的は、日本企業の営業職に就くにあたり、顧客との人間関係構築のために相手と自分との心の距離を縮めることであり、営業としての信用を得ることでもある。同時に日本語レベルの評価だけではなく、日本人と同じ土俵で自分が遂行する仕事の「専門性」をも評価されるためである。
2. イアンさんにとって日本語は職業上あるいは将来の目標とは関係がないが、音声習得を重視し、できるだけ完璧を目指している。それは、発音を言語学習のプロセスと捉えており、高いレベルの発音を習得することは自分の自信と誇りとなる。
3. ズェズェさんにとって日本語の音声習得は、その道でトップになりたいという努力の成果であり自分のプライドである。発音が自分の「プロフェッショナルな印象」に繋がる。音声習得が人間関係構築のうえで重要な役割を担っていることを英語の音声習得から経験している。

4. ミタニさんは将来日本語教師を目指している。ミタニさんは教師としての信頼を得るためには音声習得が大切であると考えている。指導する生徒への責任もある。日本に留学したからには日本語の発音を習得しているべきだと言う強い信念と理想に支えられて、日本語の音声習得に取り組んでいる。
5. エコさんにとっての音声習得は自らのライフワークである。エコさんは、「日本語教師」と「日本語使用者」の両方の立場を持つ。発音は第一印象に繋がり、発音がよいと相手も話しやすく、コミュニケーションがよくなる。発音が悪いと相手を疲れさせてしまい、段々話さなくなる可能性があるという指摘している。
6. ペドローさんは韓国では発音の重要性に気がつかなかったが、日本に来て発音の違いを指摘されてその重要性を認識した。日本語の音声習得を達成することは、自分自身の到達目標であると同時に、日本語の発音を大事にするということは日本という国を尊敬していることになり、国同士がお互い尊敬する関係に繋がるという広い視野をもって音声習得に取り組んでいる。

## 第5章 総合的考察

第5章では6名の調査協力者の語りから考察できることとして以下7点を記述した。

### 1. 職場環境における日本語の発音

学習者は、音声習得は「条件のよい仕事をみつける」といった仕事探しの入り口の段階を過ぎた後の職場環境においても継続的に必要であると認識している。日本語を使って自分の業務を遂行し、人間関係を構築し、仕事における自分の努力を社会に還元し、それについて評価を受ける、という一連の段階において、発音が常に重要な役割を果たしていることが本調査の結果から示された。

### 2. 第一印象における発音の役割

発音によって相手に与える第一印象についての学習者のとり方はその内容と意味づけが多種多様である。発音による第一印象で「外国人」と思われると、心と心との距離が広がる。口を開いたときにプロフェッショナルであるとの第一印象を相手に与える発音の役割は重要であり、第一印象で「日本語が上手い」と評価されるための要因として、発音は重要な役割を果たしている。また、第一印象で発音が悪いと日本語能力が下にみえてしまう可能性があるという学習者は認識している。

### 3. 他の外国語学習と日本語の音声習得の関係

他の外国語を習得している学習者は、言語全般に興味があり、発音も「言語学習のプロセスの一つ」とみなしていた。また、外国語の音声を習得したことによるポジティブ体験が日本語の音声習得へのモチベーション向上に繋がっている。そして一つの外国語の音声を習得できているから日本語でもできるという揺るぎない自信が日本語の音声習得をも可能にすることが明らかになった。

### 4. 他者の存在から学ぶ発音の役割

日本語の音声習得において三つの他者の存在が学習者に影響を与えている。まずは「ロールモデル」の存在が「私もきれいな発音になりたい」という学習者の目標となる。次に、音声について熱心に指導してくれる教師の存在は学習者の音声習得に対する興味を触発する。三つ目が、自らの発音に対してプラスの気づきを与えてくれる「反面教師」の存在で、発音が悪いことによる弊害を実感し、自分の学習に生かすことが出来る。

### 5. 発音に対する来日後の意識変化

自国では発音の重要性を意識しないが、来日してから「通じない」という経験を経て発音に原因があるのではないかと意識し始める。また、自国である程度日本語に触れていても「生の日本語」に触れることは少ない。来日後に単語のアクセントだけではなくイントネーションなども重要だと意識する。自国では指摘してくれる人がいないため、発音の重要性に気がつかずに楽に会話をしていたが日本に来てから教師や友達に指摘されてはじめて気がつき、発音について意識し始める。

### 6. 日本語使用機会の拡大にともなう発音の役割

日本語は日本で暮らす外国人同士の共通語として使用されている。非母語話者同士の会話においては聞き手側に「想像」、「予測」、「推察」が働かない可能性があるため、特に正しい日本語の発音が重要になると考えられる。

### 7. 他者と同じ土俵に立つための発音

職業人として日本社会で生きる外国人は日本語の発音で褒められることはもはや望んでいない。それは日本社会で日本人と同じ土俵に立って業務を遂行するうえであたりまえの能力として捉えている。また、日本社会において日本語を使って生きる人は、日本語を評価されるのではなく、自分の持つ専門性を評価されたいと考えており、音声習得はその前提になるものと考えている。

## 第6章 結論

1. 本研究から、以下の2点が明らかになった。
  - ① 学習者にとって音声習得とは何か。本研究の結果から言える結論は「日本語習得における音声習得は、一人ひとりの学習者にとっては自らの自己表現である」ということだ。それぞれにとって日本語の音声習得は彼らが真摯に人生に向き合う姿勢を反映したものである。そこには「通じるか」、「通じないか」というレベルを超えた「自分の生きる世界でどんな自分を表現したいか」という自己表現があるのだ。今回の調査協力者にとって日本語の音声習得は、相手との関係に誤解が生じたり、相手に何か意図しない印象を与えたり、失礼だと思われるような態度になったり等を避け、日本語を使う自分の世界の中で自分らしく生きていくためのものである。
  - ② 学習者にとって「日本人みたいな日本語」とは何か。それは「対等に評価される条件」、「人間関係構築のツール」、「自信」、「誇り」、「到達目標」、「プライド」、「プロ意識」、「ライフワーク」、「国への尊敬」なのである。学習者にとって「日本人みたいな日本語」はそれぞれの意味を持っており、決して日本人と「同化」したいという気持ちや「規範を押しつけられている」といったネガティブな意味を含んでいるわけではないことが確認された。
2. 本研究の結果から日本語教育への示唆として以下の4点をあげた。
  - ① 教師の音声教育に関する意識改革：学習者にとっての音声習得は「通じる」、「通じない」を超えた自己表現であることを教師は意識すべきである。それぞれの学習者にとって音声習得がどのような意味を持つのかを共に考え、その到達目標を達成するようなサポートを行うための音声教育であるという意識を持つことが重要ではなかろうか。
  - ② 学習者が発音に対する振り返りを行う意義：本インタビューを行った効果として、ある調査協力者から「このインタビューのおかげで自分自身の発音学習について深く考える機会となった」という意見が聞かれたことである。この調査協力者の言葉から、学習者に対して発音に対する振り返りを促すことがもたらす意義と重要性が示唆されている。
  - ③ 発音に対する意識化を促すことの重要性：国内、海外を問わず日本語教育の現場において初期の頃から学習者に「音声教育を受けるメリットと意義」を教師が伝え、

- 発音に対する意識化を早い段階から促すことの必要性が示唆されていると考える。
- ④ 学習機会及び教材の提供の重要性：本調査から「上級になってからは日本語の音声の違いを指摘されないようになる」ことがわかった。上級話者をサポートできるような学習機会及び教材の提供が重要であることが示唆されている。
3. 今後の課題として、個々の学習者の母国における初級時代から現在に到るまでの「ライフストーリー」の研究が必要となるだろう。その過程を明らかにすることにより、海外での音声教育の必要性や音声教育を行う適切なタイミング等といったことについて示唆が得られる。また、本研究では職場環境における学習者の音声習得についての意識が明らかになったが、今後は共に職場を作り上げている日本語母語話者の意識も明らかにしたい。

### 参考文献

- 河野俊之（2009）「一現在から未来へー日本語音声教育の発展のために」『日本語教育の過去・現在・未来 第4巻 音声』206-217、凡人社
- 戸田貴子（2006）「『発音の達人』とはどのような学習者かーフォローアップインタビューからわかることー」『第二言語における発音習得プロセスの実証的研究』平成16-18年度文部科学省科学研究費補助金基盤研究（C）課題番号16520357  
研究成果報告書、19-17
- \_\_\_\_\_（2008）「日本語音声の研究と教育における課題」、『日本語教育と音声』、3-21、くろしお出版